ぎふの教育

岐阜県教育懇話会
〒509-0108
各務原市須衛町4-291
（株）後藤鮮卵場内
℡ 058-370-1510
口座番号 00800-3-5390

綱領

一、われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
一、われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
一、われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

〈巻頭言〉

今こそ子供たちに「神話」「神道」の指導を

浅野　義英
岐阜県教育懇話会飛騨支部事務局長

一昨年、愛知県一宮市の中学校長が、建国記念日前日の朝礼で祝日講話として、「神武天皇の国創めと、仁徳天皇の民の竈」の話をし、学校のホームページに掲載したところ、市教委に「偏向教育だ」というクレームがあり、市教委は校長に注意を促し、ホームページから削除したという事があった。その校長の講話の主旨は、「神話を通じ、子供たちに〝自分より人のため〟という古代からの日本人の精神性を伝え、自国に誇りを持ってもらいたかった」ということであり、最後の締めくくりに「皆さんは、世界一長い歴史とすばらしい伝統を持つこの国に誇りを持ち、世界や世界の人々に貢献できるよう、一生懸命勉強に励んで欲しいと思います」と書いていた。読めば、立派な講話だと感心こそすれ何等問題はないのである。実際、クレームに対して、校長を励まし擁護する意見が多数あったという。

現行の学習指導要領には「神話・伝承などの学習を通して、当時の人々の信仰やものの見方などに気付かせるよう留意すること」とあり、指導を勧めている。ところが最近まで、歴史教科書に「神話」や「神道」はほとんど書かれていなかった。平成十八年、教育基本法改正がなり、その下で今の学習指導要領が二十年に公示されてから記述する教科書が出てきた。しかし、教師にその重要性の認識は薄く、教育委員会も革新系団体からの圧力に配慮してそうした教科書の採択は進んでいない。

抑も教科書から「神話」や「神道」が消えたのは、占領下の昭和二十年十二月に出された神道指令による。その骨子は「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」とあって、「大東亜戦争」や「八紘一宇」という用語の使用禁止や、国家神道、軍国主義など国家主義を連想すると思われる用語の使用を徹底的に禁止したのである。GHQは、民主主義の基盤となる「表現の自由」を高らかに唱えながら、一方で言論統制を全国に強いた。教科書から国家にかかわること、国家に尽力した英雄なども削除させた。そして「神話」や「神道」も排除され、その影響が続いて来たのである。それを評論家江藤淳氏は戦後の日本には「閉ざされた言語空間」があると表現したが、教育現場でも「神話」や「神道」を触れなくなっていた。

しかし、それらは日本の文化を考える上で欠くことが出来ない。各地で続くお祭のご祭神は多くが神話に登場し、皇室の祖先にも繋がる。

平泉澄博士は『少年日本史』で初代神武天皇と日本民族の関わりについて、「日本民族、此の島国に居住して幾千年、いつの間にか皆親類になり、親戚になっていて、いわゆる血が續いている間柄だと分かりましょう。そして其の大きな血族団結の中心、いわば本家が皇室であり、その皇室の御先祖として、国家建設の大業を成しとげられたのが第一代神武天皇でおいでになるのです」と書かれている。日本という血族集団は、皇室を中心にしながら、独自の文化を形成してきた。GHQのねらいはその皇室を中心とした国家を分断するため、皇室につながる「神話」と「神道」を国民の意識から消そうとしたのだ。しかし、今も全国に伊勢神宮をはじめ八万以上の神社が信仰の対象として息づいている。そして、教科書にそれを堂々と記述する教科書が現れるようになった。今や「閉ざされた言語空間」は開かれてきた。日本は伝統的に革命のない国柄であり、GHQの強力な占領政策でも消えることはなかった。

英国の歴史学者アーノルド・トインビーは文明が他の文明の挑戦を受け、それに打ち勝った時に新しい創造が始まると言い、文明の中核に宗教をおいて、神話には人類古来の叡智が蔵されていると喝破した。

我が国が世界に貢献する道は特色ある文化・文明をもつ国として発展することであり、今後、子供たちに「神話」や「神道」という日本文化の真髄にふれさせ、正しく指導することが益々求められよう。

道徳科教育研究協議会
第三回　研究大会　報告

編集部

当協議会は皇學館大学教育学部渡邊毅准教授（日本教師会副会長）が主催する研究団体で、平成三十年から先行実施される新教科「道徳科」の実施に向けて、その指導の在り方などを実践研究している。

日本教師会は道徳教育の重視を主張して来ており、協議会の発展を支援するため積極的に参加している。

今回は十一月二十七日（日）、研究主題「道徳科授業における人物教材の可能性を探究する」とし、皇學館大学の大教室を会場にして行われた。

従来の道徳授業では、偉人は時代にそぐわないとか立派すぎて子供では議論ができないとして、あまり使われて来なかった。しかし、現行の学習指導要領でその価値が見直され「先人の伝記」を題材とする授業も奨励されるようになった。ただ伝記を扱おうとすると、身近でないこと、資料の読み取りに時間がかかることなど、実施上の難しさがあった。

そこで「先人の伝記」の活用の仕方を検討しようと、実践を持ち寄り交流が行われた。

一、開会挨拶

当協議会顧問の鈴木克治京都教育委員会指導主事が発表者の紹介を合わせて、研究協議会の目指すものや大会テーマに関して東条英機・ステイブジョブス・稲盛和夫の意外なエピソードを紹介しながら人物に学ぶことの大切さを述べた。

二、講演

演題「銅像教育という私の使命」

講師　大阪市立南恩賀島小学校

教諭　丸岡慎弥　先生

先生は銅像がその人物の生き方を表しており、教材になりうると気付いてから、銅像教育と自ら名付けて人物伝による授業を積極的に展開している。

（1）なぜ銅像教育なのか

最初に銅像にはどんな価値があるか、四体の銅像を示して説明した。

①まず銅像のポーズ・向き・立つ場所などにはみな意味があり、いつどのように建てられたかを調べると伝えたいものが見えてくる。

例えば墨田区役所にある勝海舟の銅像は指を突き出したポーズであるが、それは米国をさしていて新しい日本を思い描いているという。

②銅像にはエピソードがある。

銅像になる人は人々に仰がれ慕われるだけ立派な人物であり、偉大な業績を残している。

外務省の庭に明治初期に条約改正や日清戦争など外交上の難問によく対処した陸奥宗光の銅像がある。そこは職員が通る場所で、職員に外交官としての気概を問いかけている。

③銅像は設置されている場所へ行って観察ができ、人物を実感できる。また、その場に立つと人々の思いも感ずることができる。

日本で最も多い銅像は二宮金次郎で、全国に千体以上あると言われている。戦前、多くの学校に建てられ、子供たちの目標になるようにと、いつも目に触れる校庭に設置された。

（2）授業の実際（小学校四年生）

「台湾にダムを造った八田與一」

①導入

・かつて台湾は日本が占領したが、台湾の人は日本のことをどう思って（反感を予想）いるかを考えさせる。

・東日本大震災のおり二百億円以上の救援金を出してくれたり、ＷＢＣで台湾選手が日本の観客に礼を述べたりした事実（親日感情）を示す。

②銅像を見て分かることを発表

・銅像は座った姿　・作業の格好

③八田與一の事業の説明

・台湾は非常に貧しく農業では水不足で困っていた。それを助けるには大きなダムが必要。しかし、巨額の資金がかかり、上司は反対した。

・農民が半分出すならと許可が出て、農民に賛成するよう何度も説得。

・工事にかかるが労働は過酷。村を作って家族を呼び、農民に喜ばれた。しかし、五十人が亡くなるという大事故発生。與一は村中に謝罪。継続が危ぶまれたが農民はダム造りをやめないで欲しい、亡くなった人はダム造りに誇りに思っていたと訴えた。

・関東大震災で東京は壊滅。予算が復興に使われ、作業を続けるには台湾人作業員を首にしなければならない。與一は日本人を首にして、農民とともに工事を続けて十年で完成させ、台湾一の穀倉地帯を作った。

④子供に感想を書かせる

⑤與一のその後のエピソードを語る。

・銅像建立はダムの完成後に住民から出されたが、八田は断っている。

・できるだけ低い銅像にということで諒承。座って考え事をしている姿。

・戦後、銅像が破壊されそうになったが、住民たちは倉庫に隠して護り、三十年後、元の場所に設置した。

（4）授業の効果（小学校四年生）

一般に銅像になっているような偉人の話をしても効果がないと思われがちだが、実際に授業を受けた子供たちは印象深く覚えており、次回を楽しみにしているくらいである。

十一月に「勇気」を主題に道徳の授業を行った時、勇気のある人にどんな人がいたかを聞いたところ、一学期に行った銅像「陸奥宗光」や「八

田與一」の名をあげる子がいた。時間が経っていたのに名前を覚えているほど印象深かったと考えられる。

（5）銅像教育の誕生とこれから

教師としての新人時代に荒れた小学校に勤務し、授業が成立しなかった。それを克服しようと教育書を読みあさり、いろいろな研究会に出向いた。そこで素晴らしい実践家と出会い、示唆を受け「銅像」に出会った。以後、必死にそれを教材にした授業を繰り返し、それが認められて図書出版や講演につながり、今は自分の使命と考えるようになった。この教育を通して子供たちや日本のために尽くしていきたいと述べた。

三、「道徳」模擬授業

指導者　津田学園小学校教諭
長谷川　智哉　先生

先生は育鵬社の道徳教科書「十三歳からの道徳」を使った授業を実践し、いろいろな所で成果を報告している。

今回は皇學館大学の学生九人を生徒に見立てて、映像資料を使った模擬授業を二つ行った。

（1）「吉田沙保里―父からの贈物」

吉田沙保里の強さの秘密は、父親ゆずりのタックルにある。過酷とも言える厳しい鍛え方で彼女の代名詞「高速タックル」を身に付けた。

最初は誰の父親とも言わずにスパルタ式の指導をする様子を見せ、学生たちにひどい親だと言わせる。途中でそれが吉田沙保里の父親と知らせ、優勝を繰り返すなかで親の本当の思い＝心を鬼にして指導していたことに気付かせていった。学生たちは自分の親にも同じ思いがあることを覚り、感謝の言葉を出していた。

（2）「中江藤樹」

近江聖人「中江藤樹」が幼い時、修行の場から家にもどった藤樹を母は家に入れなかったというエピソードを話し、母親の深い思いに気付かせ、学問に打ち込んでいった藤樹の強い意志を理解させた。テンポよく学生の意見を引き出しながら藤樹の生き方を考えさせる授業であった。

四、シンポジューム

テーマは「教育勅語と人物伝教材を活用した授業実践」で、渡邊准教授の司会のもと四名の教師が次の発表をした。（丸岡教諭は講演で略す）

塚本幼稚園幼児教育学園教頭の籠池町浪先生は同園が教育勅語の精神を中心とした教育を推進していると実践例をあげて説明した。例えば児童に唱歌を教え、日本の心を伝えている。幼い時にこそ一生の基盤を作っていくことが必要と考えている。また父兄の道徳への関心を高めるため、その道のトップの人物を招聘し生き方を語ってもらっている。

同園では道徳や日本の文化・伝統を子供たちに伝えられるような教師を求めていると、会場内にいた多くの学生に説いていた。

山口大学教育学部附属光中学校の藤永啓吾教諭は、現行の学習指導要領が「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発」を提唱していることを指摘され、それをどう具現化したらよいか模擬授業で示し、学習指導要領を解説しながら理論的に説明された。

模擬授業は「夢」をテーマに、漫画家やなせたかしが題材であった。

氏は五十歳の時、始めて雑誌に「アンパンマン」が掲載された。しかし、評判は悪く、挫折の連続であった。ところが三～四歳の幼児に喜ばれるようになり、やがて「アンパンマン」は子供たちの英雄になった。やなせさんが六十九歳の頃であった。

先生は質問を交えながらこのストーリーを語り、終末で夢をかなえることは実際には難しいことだということを、高校生の夢に関する悩みに答える形で考えさせ意見交流をした。

人物を扱った授業はとかく立派な人物ほど感心して終わることが多い。従って何が素晴らしいかを焦点化しないと子供たちの目標にはならず、行動に結びつかない。その点、学習指導要領には価値項目についてどんな道徳性を身に付けるのかが示されており、参考にすべきだと述べた。

浪速高等学校・中学校教諭松尾大輔先生は「偉人教育の可能性」と題し、生き生きと実践報告した。

偉人教育の方法は価値の探求が大切で、そのためには①明確な目標の設定②具体的な構想③指導の工夫が必要である。そして価値の探求のため二時間にわたることもあるという。一時間目に偉人の生き方を紹介し、その人のどこが素晴らしいかを話合い、その中から課題を絞ると二時間目の価値の探求ができる。

この授業を通して子供は自分の経験と偉人の生き方を比較するようになり、生き方を考えるようになったと、学級の児童の変化を紹介された。

以上、今大会は発表者がいずれも若い教師で、意欲的な実践報告を行うとともに自身の失敗や成功体験も語った。参加者は模擬授業を楽しみ、教師を目指す学生たちには良い刺激となる魅力的な大会であった。　H

次期学習指導要領への提言～文科省に対するパブリックコメントから～橋本秀雄

一、戦後教育の抜本的見直しのためには教育の基本に立ち戻ること

ここ十数年の中心課題「生きる力」の育成は、次期学習指導要領でも継承されることになったが、十分に成果をあげていない。中央教育審議会も認めているように今日の若者は社会参画への意欲が低く、自己肯定感も低いなどたくましさがない。引きこもりの若者も依然として百万人とも言われている。その原因は学校や教師の共通理解が不足していたという総括になっているが、本当の目標になりえなかったのではないか。

戦後の教育界には日本国民を育てるという明確な姿勢がなかった。そのため日本の文化・伝統が十分に教えられず、子供達は日本に生まれ育った幸運を感じられなかったのではないか。感激がなければ自分が将来の人々のために生きようという気持ちにつながらない。

教育基本法が改正され「公の精神」が明示された。学習指導要領改訂にあたっては日本人の育成を正面にすえて考えるべきである。

次に今日の子供たちは成長に非常に不向きな環境にある。将来の社会に役立つ人間の育成を考える前に、人はどう育つのがよいのかを基盤にして教育を組み立てるべきである。例えば今の子たちは兄弟が少なく、近所付き合いや親戚付き合いも減った中で生活している。したがって人と接して成長する環境が不足している。女性活躍社会も結構だが、0歳児を保育所に受け入れることを推進するのは本当に子供の育ちにとっていいことなのか。子供を精神的に不安定にし、心の発達上取り返しのつかないことにならないか。など現代の子供達の育ちを根本的に見直し、その上で学校教育を再構築しなければならない。

二、目新しいものを取り入れるより、子供の心を育てる内容を優先する

①英語やＩＴＣ教育の拡充は不要

学校が多くの課題を抱えすぎて機能不全に陥りかねない。基礎的・基本的な内容の充実に目を向けたい。

②教育の根本は人間の育成＝心の発達＝道徳教育を最重点に

道徳科の新設は結構なことだが、今回のように常に討論を求めるなど形や方法にとらわれないようにしたい。感動、気づきは討論を通していけば得られるものではない。

③国語教育と歴史教育は教科のなかでも日本人の育成を担う中心教科である。国語は単に意思伝達のツールを学ぶのではない。国文の中ににじむ歴史、伝統が子供達の日本人としての感性を育て、ひいては日本人として生きる喜び、自信、勇気を生む。

三、将来必要な内容は発展的に扱う

①英語やＩＴＣの教育は中学生以上でもよく、それも基礎に留め、専門的には選択や職業高校にゆだねる。

②国語では古文・漢文などを発展として上級学年で指導する。

③総合的な学習の時間は小学校では無理。中学校でも難しく、有功に使えていない。その時間を教科の発展として中学、高校の教科に入れる。

四、人と人との交わりのなかで人は育つことを学校生活のなかで実現

①低学年から人と接する機会をつくり、一緒に行動し生活する体験をもたせる。低学年は遊びからはじめ、高学年は学校外の地域との協働へ。

②少人数教育が推進されているが、集団のなかでこそ学びうることが多い。指導場面にもよるが、少人数一辺倒にならないようにしたい。教師の指導力も低下する。

明治維新を成し遂げた人々は、日本人の伝統的な道徳を身に付けた人々であって、西洋の学問に明るい人ばかりではなかった。変化に対応するには自分自身の核になるものを確立していることが不可欠。先が読めないだけに変化への対応に目を奪われることなく、堅実で実質的な教育を推進したい。(H28, 10, 初め提出)

微風・烈風 ▲二十年続いた「ゆとり教育」がやっと終わった。いじめや不登校をはじめとする問題を残してだ▲教師は文科省の掲げる新しいスローガンに無分別に飛びつく傾向がありはしないか▲今度は「アクティブラーニング」が流行っている。能動的、課題解決学習といって児童生徒が自発的に課題に取り組むようにしようというわけだ。だから生徒に話をさせ、教師はしゃべるなという▲ゆとりも、アクティブも方法であって目的ではない。あくまでも児童生徒の学力向上、道徳性の涵養が目的のはずであり、何より心に沁みる授業が大切である▲明治以降一流国に留学した北里柴三郎以下の学者達は世界的な成果を上げた。そこにとどまれば名誉も地位も待遇も保証されたのに、彼らは帰国し日本の発展と若者の教育に心血を注いだ。と授業で教わった生徒は他の教師に誇らしくこれを語ったという▲教師は文科省の学習指導要領に沿って授業をする。公務員である以上それに則って行わざるを得ない。が、その結果は誰も責任をとらない▲国民は教育委員会や学校に任せておけば安心と放置していてはいけない。子供の人生、国の未来がかかっている。現場の実態を知り、意見をすることは国民の権利であり義務ではないか。Y